

UNA VOCE

ユリア・ゲルセワ

Julia Gerszewa

★メゾソプラノ

ローザンヌ歌劇場初来日公演
《カルメン》のタイトルロール

バレエ・コンクールで名高いスイスのローザンヌ。でも、オペラの上演でも250年の歴史を有する芸術の街である。そのローザンヌ歌劇場が、この秋、フランス・オペラ随一の名作《カルメン》をひたして初来日する。主演者のひとり、ロシアを代表するメゾソプラノのユリア・ゲルセワが、舞台への想いを熱く語る。「実は、子供の頃から日本の文化に魅了されていました。父が日本語の通訳をしているので、サンクトペテルブルクの実家には、日本に関する本や映像、辞書や事典類がいつもたくさんありました。今回ローザンヌの人々と共に、この美しい国を再び訪問することができてとても嬉しく思います。音楽への造詣の深さで有名な皆様は、カルメンという最も重要な



役柄で聴いて頂けることを、幸運に思っています」

ゲルセワは、10月のローザンヌ歌劇場初来日公演《カルメン》(演出ベルナル、指揮ディーデリッヒ)の12・14日(東京文化会館)・25日(大宮ソニックシティ)に登場予定(問合せ)コンツェルトハウス・ジャパン 03-3538-8188

マスネの《ヴェルテル》の人妻シャルロットを録音し、名声を博したゲルセワ。同じフランスものでも全く方向性の違う野生的なカルメン像をどのように演じるか?

「ビゼーの描いたカルメンという女性像は、メゾソプラノの持ち役で一番難易度が高く、かつ最も興味をそえられる役柄です。カルメンを歌うためには、パートに相応しい声の個性を持つというだけでは不十分であり、その非常に複雑な心理状況を浮彫りにするため、俳優と同じくらいの素養や演技力が要求されます。それがなおさら私の挑戦心を駆り立ててくれるのです。カルメンは大変魅力的でセクシーな女であり、男を惹き付けるために自分の美貌をどう使うべきかを熟知しています。男たちも、自由への渇き知らない欲求を持ち、あらゆる妥協を拒むこの強い女性に、畏敬の念すら抱いています。裏を返せば、彼女の人格には男性的な要素が多く含まれているとも言えます。私にとっては、イタリヤ・オペラも重要なレパートリーですが、今回は、最も人気の高い名作《カルメン》に全力を尽くします」